

17世紀聖地巡礼記にみるナザレ

藤井 陽子

1.1. はじめに

新約聖書には「ナザレの人イエス」という表現が何度か出てくる。フランス語による表記は、「*Jésus de Nazareth*」¹、「*Jésus le Nazôréen*」²、「*Jésus le Nazarénien*」³と差異はあるものの、弟子や周囲の人々、イエス自身もこれらの表現を「ナザレの住民イエス」、または「ナザレ出身のイエス」という意味で用いていたと思われる。

イエスの生誕地とされるベツレヘムや受難の地エルサレムとは違い⁴、ナザレの名は旧約聖書には出てこない。この町は福音書で初めて言及され、イエスが幼少年期から公的生活を始めるまでの時期を過ごした故郷としてキリスト教徒の信仰と巡礼の対象となり、時代による変遷を経て現在に至っている。本稿では、ナザレが巡礼地として再整備され始めた17世紀の巡礼記の記述を比較検討し、どのような場所がどのような根拠を持って巡礼地とされていたのかを見ていく。

1.2. 新約聖書のなかのナザレ

洗礼者ヨハネから洗礼を受ける以前のイエスについて、マルコによる福音書とヨハネによる福音書は多くを語らない。

マルコは、「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた」⁵と簡潔に述べている。受洗後に訪れたカファルナウムの会堂では、汚れた霊に取りつかれた男が「ナザレのイエス、かまわないでくれ」と叫ぶ⁶。ヨハネはイエスの最初の弟子のひとりフィリポの言葉を借りる。「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ」⁷。これらの記述からナザレがイエスの故郷・出身地として認識されていることがわかる。

マタイとルカはそれぞれ、イエスの誕生前からナザレの町に定住するまでの経緯を語っている。マタイによると、王座を奪われると思ったヘロデが幼い子どもたちを虐殺しようとしたため、ヨセフ一家はエジプトに逃れた。一家はヘロデの死後、その子アルケラオが支配するユダヤを避け、

¹ Jn 1, 45 ; Ac 10, 37. フランス語の聖書は原則 *La Bible de Jérusalem* (Desclée de Brouwer, 2000) を、日本語訳聖書は新共同訳 (日本聖書協会、1987年) を用いた。

² Ac 2, 22 ; 22, 8.

³ Mc 10, 47 ; Lc 24, 19.

⁴ ベツレヘムとエルサレムの巡礼については拙稿「エルサレム巡礼—17世紀巡礼者のたどった道程」(『筑波大学フランス語・フランス文学論集』第28号、2013年、27-52ページ) および「ベツレヘム巡礼—17世紀聖地巡礼記にみる降誕の町」(同第24号、2009年、115-129ページ) を参照のこと。

⁵ マルコ1章9節。

⁶ マルコ1章24節。

⁷ ヨハネ1章45節。

夢のお告げに従ってガリラヤ地方のナザレに居を定める⁸。マタイのこの部分の記述だけでは、ナザレとイエスの両親の関係性は明らかではない⁹。

ルカはイエスの誕生にまつわる話を詳しく描写することで、この関係性を説明する。「天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった」¹⁰。ここで、イエスの母であるマリアがナザレの住人だったことが明示される。そしてヨセフもまたナザレに住んでいたことが、「ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った」¹¹という記述から明らかにされる。ここでルカは、イエスの誕生がベツレヘムであった理由も説明している。ダビデ家の出身者であるヨセフはローマ帝国による国勢調査に際し、祖先代々の地であるベツレヘムに戻って申告する必要があったというのだ。なお、ルカにはエジプト逃亡の記述はなく、イエスの誕生後、エルサレムで誕生にまつわる儀式を終えたのち、一家はナザレに戻っている¹²。

「ナザレ人」という言葉はまた、初期のキリスト教徒の蔑称としても用いられた。ユダヤの大祭司アナニアによって訴えられたパウロは総督フェリクスの前に引き出される。アナニアの弁護士テルティロはパウロを、「実はこの男は疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている者、『ナザレ人の分派』の首謀者であります」¹³と告発する。ユダヤ人の大祭司から見れば、イエスを信仰するパウロたちはナザレから出た「分派」、反乱分子のように認識されていたことが読み取れる。

1.3. 17世紀までのナザレ

ナザレがキリスト教の聖地として整備され始めたのは4世紀のことで、326年にコンスタンティヌス帝が受胎告知の場とされた洞窟の上に最初の教会を建てたといわれている。7世紀にはイスラム教徒に征服されたが、十字軍の時代にはガリラヤ公タンクレード¹⁴が受胎告知教会を再建した。1187年にサラディンに征服され、1240年と1250年には再びキリスト教徒の手に戻ったが、1263年にマムルーク朝第5代スルタンのバイバルス¹⁵によってすべて破壊されてしまった。ナザレがキリスト教徒の巡礼地として再整備されるのは、1546年にフランシスコ会がオスマン=トル

⁸ マタイ 2 章 23 節。

⁹ マタイにとって、イエスがナザレの出身だということは、預言者たちの「彼はナザレの人と呼ばれる」という言葉が成就した根拠になっている。ただし、このマタイの引用が旧約聖書のどの部分に対応しているのかは不明である。

¹⁰ ルカ 1 章 26-27 節。

¹¹ ルカ 2 章 4 節。

¹² ルカ 20 章 39-40 節：「親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。」

¹³ 使徒言行録 24 章 5 節。

¹⁴ ガリラヤ公タンクレード：1072/1076 年生、1112 年没。南イタリアのノルマン人諸侯の一人で、第一次十字軍の主人公の一人。ナザレに首都を置いた。

¹⁵ バイバルス・アル=ブンドクダーリー、在位 1260 年-1277 年。

コ帝国から受胎告知教会の再建許可を得、1620年にレバノンのファクレディン2世¹⁶から正式な居住許可を与えられた後のことになる¹⁷。

2. 福音書の記述

福音書のなかでナザレが舞台になっているのは、前述の受胎告知と、イエスが故郷では預言者として受け入れられなかったという2つのエピソードである。ナザレの巡礼地はこれらのエピソードをもとに整備され、発展していったと考えられる。

2.1. 受胎告知

受胎告知はルカ1章26–37節で語られている¹⁸。イエスの先駆けである洗礼者ヨハネの両親にお告げがあった6か月後、今度はナザレの乙女マリアの元に天使が訪れ、「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」と、マリアを祝福する。天使の言葉がすぐには理解できず戸惑うマリアだが、最終的には「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と答え、天使の言葉を受け入れる¹⁹。

2.2. 会堂での出来事

ヨルダン川で洗礼を受けた後²⁰、青年イエスは故郷のナザレに戻り安息日に会堂で聖書を朗読しようとする。「イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおりに安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった」²¹。ルカでは、ナザレの住民はイエスの教えの素晴らしさに感嘆し、「この人はヨセフの子ではないか」と驚く。

マタイとマルコでは、場所は「故郷」とされていてナザレという町の名は明示されていない。聴衆は自分たちのすぐ近くに住んでいてその家族をすべて知っているような人が預言者であると到底思えず、「このように、人々はイエスにつまずいた」²²。イエスは「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言い²³、故郷を後にする。ルカでは、このイエスの言葉に怒った群衆がイエスを会堂から引きずり出し、町のはずれにある崖の上から突き落とそうとするが、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去ったという記述が付け加えられている²⁴。

¹⁶ ファクレディン2世 (Fakhr el Dîn II, Fakhreddine II, 1572-1635)。レバノンのドゥルーズ派指導者、レバノン総督。1590年父の跡を継ぐが、1613年から1618年にかけてイタリアへの亡命を余儀なくされる。帰国後は、レバノンに印刷所を作ったり、ヨーロッパから画家や建築家を招いたりなどして近代レバノンの礎を築いた。

¹⁷ ナザレにおけるフランシスコ会の歴史は、以下のサイトで見ることができる。

<http://www.nazareth-fr.custodia.org/>

¹⁸ マタイ1章18節以下では受胎告知がヨセフの立場から語られている。ヨセフの夢の中に天使が現れ、婚約者のマリアが聖霊によって身ごもったことを告げる。

¹⁹ ルカ1章38節。

²⁰ マタイ3章13–17節、マルコ1章9–11節、ルカ3章21–22節。

²¹ ルカ4章16節。

²² マタイ13章57節、マルコ6章3節。

²³ マタイ13章57節、マルコ6章4節。

²⁴ ルカ4章29–30節。

3. 17世紀巡礼記によるナザレ

聖地巡礼記『聖なる花束』（1614年）の筆者ジャン・ブーシェは、エリコの近くにあるイエスが悪魔に試みられた誘惑の山に登頂し、はるかナザレの方を望んで残念がる。「わたしはあそこに入っていけないことにあまりに怒っていたので、あの聖地を見ることが許されないことがわかって悲しみと憂鬱から泣いてしまった。あの聖地はわたしたちの罪の贖いのすべての場所のなかで唯一見ていないものだったのだ」²⁵。

ブーシェの聖地滞在当時、ナザレやカナなどの町は通常の巡礼ルートには含まれておらず、すべての巡礼者が訪問したわけではなかったという²⁶。ナザレをはじめとするガリラヤ地方の巡礼が行われるようになるには、フランシスコ会士がナザレの土地取得を認められた1620年以降、修道士たちが常駐して聖地として管理し、巡礼者の訪問を組織していくのを待たねばならない。1640年代後半に聖地に滞在していたシュリウスや、1660年代に聖地を訪れたグージョン、デシャンなどにとっては、ナザレ巡礼はすでに当然のことになっていたと考えられる。彼らの記述を比較することで、イエスの故郷がどのように聖地巡礼地として整えられていったかがわかるのではないだろうか。このあと、巡礼記のなかで言及されている受胎告知教会を始めとする聖地について検証する。

3.1. 受胎告知教会とフランシスコ会修道院

カトリック教会の受胎告知教会は現在のナザレ旧市街の東側に位置し、聖母マリアが受胎告知を受けたとされる洞窟の上に建てられている。教会の北東側にフランシスコ会の修道院が隣接し、修道院の北側には聖ヨセフ教会がある。

1907年から1909年にかけての発掘により東西に75メートル、南北に30メートルあった中世の教会の基礎が発見された。1730年には、東西に20メートル、南北に32メートルの教会が中世の教会と交差するような形で再建された。現存の受胎告知教会は中近東最大級の教会で、1969年に完成したものである。

1646年から1647年にかけて聖地に滞在したシュリウスがナザレを訪れたとき、この教会はまだレンガ造りの礼拝堂の状態だった。「天使が聖処女に挨拶をし、彼女がわれらの主と聖ヨセフと暮らした家は聖アンヌの世襲財産だったという。その家は町の中心部、とはいえ東側の最も低い部分にある。この神聖な住居全体はひとつの低い部屋でできており、一部は人の手で作られ、一部は山の石を削って作られている。この神聖な場所に、静修派修道士ジャック・ド・ヴァンドーム師が、1620年に現在あるような小さな修道院を建てた。ここには修道院を守り神に仕えるため

²⁵ Boucher, *Le Bouquet sacré composé des plus belles fleurs de la Terre sainte*, éd. Marie-Christine Gomez-Géraud, Champion, 2008, p. 368 : « J'étais si fâché de n'avoir entré là dedans [*sic*] que j'en pleurai de tristesse et d'ennui, me voyant privé de la vue de ce lieu sacré, lequel seul me restait à voir de tous les lieux de notre rédemption ».

²⁶ Boucher, *Ibid.*, note 276 : « Boucher parle bien sûr des lieux où les franciscains amènent ordinairement les pèlerins. À cette époque, même si quelques pèlerins prennent la route du nord, le pèlerinage de Galilée (Nazareth, Cana, Thabor, Tibériade) ne fait pas encore partie des circuits habituels ».

に5、6人の修道士がいる」²⁷。この記述から1620年に居住許可を得たフランシスコ会士たちがすぐに仕事にとりかかったことが読み取れる。シュリウスの約20年後、1667年にナザレを訪問したデシャンも修道院について軽く触れている。「ナザレにつくと、われらがフランシスコ会士の住まいに行き、そこで大変歓迎された。この修道院は町の東側の端に建てられ、かつて聖処女と聖ヨセフの家があったのと同じ場所にある。(中略) 普通7、8人の修道士が暮らしており、キリスト教国の王侯君主やその他の篤志家が毎年聖地に送ってくる寄付で生活している」²⁸。シュリウスの頃より修道士の数が若干増加している。

翌1668年に聖地に滞在したグージョンの記述からは、彼らの小さな修道院が堅固な城砦のような外見を持つ建物になっていることがわかる。「受胎告知教会はかなり遠くから見分けられる。わたしたちのすべての神秘の源と起源を内包するこの修道院は、小さな城のように建てられているからだ。アラブ人が絶えず侵入したり盗みを働いたりするのを防ぐために、厚く高い壁で防備しなければならなかったのである」²⁹。

受胎告知の礼拝堂内部の描写は巡礼者によって多少の差異があるが、最も詳細なシュリウスの記述を見てみよう。「礼拝堂に入るには4段の石段を降りなければならない。ドアは直接エルサレムの方角である南側にあり、窓が一つしかなく、その窓がドアとともに礼拝堂に明るさを与えている。礼拝堂には現在二つの祭壇がある。一つは聖アンヌに、もう一つは聖ヨセフに捧げられている」³⁰。

洞窟の南側から4段石段を降りたところがマリアの家のドアになる。この場所にあったマリアの家は天使たちによってイタリアのロレッタに運ばれたとされている³¹。家の跡地の北側、一段低いところに受胎告知の洞窟があり、さらにその奥にはフランシスコ会修道院に続く石段がある。

シュリウスの記述によると洞窟は長さ約4メートル、幅2.8メートル、高さ4.2メートルあり³²、

²⁷ Bernardin Surius, *Le Pieux Pelerin, ou Voyage de Jerusalem*, Bruxelles, François Foppen, 1666, p. 304 : « On tient que la maison où l'ange salua la sainte Vierge, et où elle demeura avec Notre-Seigneur, et saint Joseph était du patrimoine de sainte Anne. Elle est au milieu de la ville, toutefois en la partie la plus basse, qui est vers l'orient. Toute cette sacrée demeure consiste en une salle basse, dont une partie est de fabrique, et l'autre est taillée dans la pierre de la montagne. Sur ce saint lieu le révérend père Jacques de Vendôme récollet, fit bâtir l'an 1620 un petit couvent tel qu'il est à présent, où il y a toujours cinq ou six religieux pour le conserver, et y servir Dieu ».

²⁸ Barthelemy Des Champs, *Voyage de la Terre Sainte et du Levant*, Liège, Pierre Danthez, [1678], pp. 191-192 : « Étant arrivé à Nazareth, je m'en allai à la résidence de nos religieux, où je fus reçu avec toute sorte de caresses et de charités. Ce couvent est bâti sur l'extrémité de cette ville du côté qui regarde l'orient, assis sur le même lieu où était autrefois la maison de la Sainte Vierge et de saint Joseph [...] nous y résidons ordinairement à sept ou huit religieux, et vivions des aumônes que les princes chrétiens et autres bienfaiteurs envoient tous les ans dans la Terre Sainte ».

²⁹ Jacques Goujon, *Histoire et voyage de la Terre-Sainte*, Lyon, Pierre Compagnon et Robert Taillandier, 1672, p. 66 : « L'on l'aperçoit dis-je d'assez loin, puisque ce couvent qui renferme la source et l'origine de tous nos mystères, qui est le premier de tous les sanctuaires, est bâti comme un petit château qu'il a fallu fortifier d'épaisses et de hautes murailles, pour se défendre de l'incursion et des larcins que font continuellement les Arabes ».

³⁰ Surius, *op. cit.*, pp. 307-308 : « pour y entrer il faut descendre quatre degrés de pierre : la porte est directement du côté de Jérusalem qui est au midi, n'y ayant qu'une fenêtre laquelle avec la porte fournit de clarté à la chapelle, qui est à présent pourvue de deux autels, l'un desquels est dédié à sainte Anne, et l'autre à saint Joseph ». シュリウスはさらに天使ガブリエルの祭壇が悪天候により破壊されていること、フランスの母后の聴罪司祭が祭壇に飾るための2枚の絵を送ってきたことを報告している。

³¹ Surius, *op. cit.*, pp. 306-307, Goujon, *op. cit.*, pp. 67-68.

³² 1ピエを32.4センチメートルとして換算、小数点以下第2位を四捨五入した。

受胎告知の瞬間にマリアがいたのはこの洞窟の中で、天使ガブリエルは南側の入口から洞窟の手前の部屋に入ってきたとされる。

家の反対側、北側に接しているのがむき出しの岩に自然にできたのか、人が掘ったのか、アーチ型になった洞窟で、長さは 12.5 ピエ、幅 8.5 ピエ、高さ 13 ピエある。わたしたちの修道院からは石段を 25 段降りていく。大天使ガブリエルから受肉の得も言われぬ神秘を告げられ、その無垢な体に神の子を身ごもったとき、エルサレムの方に顔を向けて聖処女がいたのはこの洞窟である。神の使者を務めた大天使は聖処女から、私が測ったところでは 5 ピエ離れたところにいた。前述の家からこの洞窟に入るにはたった 1 段降りるだけでよい。何の境界もなく、家と洞窟で一つの礼拝堂になっている。ここで指摘しておかねばならないが、天使が聖処女に敬意を表した時、天使はロレットの聖家の中において、聖処女は洞窟にいた³³。

グージョンの記述はより具体性を欠いたシンプルなものである。「それは地下の小さな礼拝堂で、よりよく言うと、岩に掘られ、自然に穿たれた東西に長さ 18 ピエ (5.8 メートル) の小さな洞窟である。いわば自然がこの仕事を始め、人の手が仕事を終えたのだ。北、南、西側は古い城壁に支えられている。東側に聖処女の受胎告知の祭壇がある」³⁴。

デシャンは南側の入口からではなく、北側の修道院から直結する通路を降りて洞窟に入っていく。階段はシュリウスより 2 段少なく、洞窟の大きさもより狭く描写されている。「この部屋には地下室のようなところに 23 段の石段を降りていく。この場所は岩に穿たれた洞窟のような形に作られている。長さ 11 ピエ、幅 7 ピエ (3.6 メートル×2.3 メートル) あり、わたしたちが毎日聖ミサを挙げる祭壇がある」³⁵。この 3 人の巡礼者の描写から、もともとあった天然の洞窟を人の手で広げたものであること、東西に長い小さな洞窟であることが読み取れる。

受胎告知の礼拝堂内には、マリアと天使ガブリエルがいた場所を示すために 2 本の柱が立てられているが、シュリウスの描写に従うと、マリアの柱は洞窟の中に、ガブリエルの柱は 1.6 メートル離れた部屋の中に立っていることになる。「これらの青と白の模様がある斑岩らしい 2 本の大きな柱は、1 本が神の子を宿したときに栄光に満ちた乙女がいた場所に、もう 1 本は天使ガブリエルがいた場所に聖ヘレナが立てさせたもので、今もそこにある。天使ガブリエルの柱は完全に

³³ Surius, *op. cit.*, pp. 307-308 : « L'autre partie de la maison joignant celle ici vers le septentrion, est une grotte ou spélonque [caverne, grotte] faite en forme de voûte, ou de la nature, ou de l'industrie des hommes dans le rocher vif, ayant en sa longueur douze pieds et demi, en largeur huit et demi, et en hauteur treize, on y descend de notre couvent par vingt-cinq degrés de pierre. C'était en cette grotte que la sacrée Vierge était lorsque l'archange Gabriel lui annonça l'ineffable mystère de l'Incarnation, et conçut le fils de Dieu en son corps virginal, ayant la face tournée vers Jérusalem. L'archange faisant son ambassade se tint cinq pieds de la sainte Vierge, selon ma mesure. On descend une marche seulement pour entrer de la susdite maison en cette grotte, n'y ayant aucune séparation, l'une et l'autre ne faisant qu'une chapelle. Il faut ici bien remarquer que l'ange était dans la sainte maisonnette de Lorette, lorsqu'il salua la sainte Vierge, et la sainte Vierge dans la grotte ».

³⁴ Goujon, *op. cit.*, p. 67 : « C'est une petite chapelle sous terre, où pour mieux dire, une petite grotte piquée, et taillée naturellement dans le rocher de 18 pieds de longueur de l'orient à l'occident. La nature dis-je a commencé cet ouvrage, et l'artifice l'a achevé, soutenu par de vieilles murailles du côté du septentrion, du midi, et de l'occident, et à la roche vive à l'orient, où est le maître-autel de l'Annonciation de la sainte Vierge ».

³⁵ Des Champs, *op. cit.*, p. 192 : « L'on y descend comme dans une cave par vingt-trois degrés de pierre ; ce lieu est fait en forme d'une grotte taillé dans le roc, ayant onze pieds de longueur, et sept de largeur, et il y a un autel sur lequel nous célébrons tous les jours la sainte messe ».

残っていて、高さ 17 ピエ、太さ 7 ピエあるが、もう 1 本は下から 3 ピエのところまで折られていて、何にも支えられずに宙に浮いている。わたしはその柱をこの目で見て、何度も何度も接吻した」³⁶。

この柱にはグージュオンも言及している。「南側の、高さ 17~18 ピエの 2 本の柱に見とれてしまう。そのうち 1 本の柱は丸天井を支える土台から 2 ピエのところまで壊されている。もう 1 本は完全な状態で、2 本の柱は 5 ピエ離れて立っている」³⁷。デシャンの描写では 2 本の柱の距離はさらに近くなる。「西側には 2 本の大きな大理石の柱が 3 ピエ半の距離をあけて立っている。一本は南側を向いていて、天使がとても神聖な乙女に挨拶をしたのと同じ場所にある。反対側にもう 1 本の柱があり、それはそのとき乙女が祈っていた場所を示している。こちらの柱は何年も前に（わたしたちの修道士たちが教えてくれたところによると）トルコ人によって折られた」³⁸。

マリアの家とその北側の洞窟は丸天井で覆われていて、床から天井を支えるはずの柱が 2 本立っている。南側の柱が受胎告知の際に天使ガブリエルがいた場所を示し、北側の柱はマリアがいた場所を示している。マリアの柱は根元から数 10 センチのところまで破壊され、天井からつり下がった状態で残されている。シュリウスによると、2 本の柱の間に宝物が隠されていると信じ込んだこの地方のパシャが、手始めにマリアの柱を破壊しようとしたのだという。しかし、この柱が根元の部分を破壊されても宙ぶりの状態で残ってしまったので、トルコ人たちは恐れをなして破壊活動を中止し、逆に彼らの信仰の対象にしてしまった³⁹。デシャンも宝物説をとるが⁴⁰、グージュオンは単に異教徒がキリスト教徒の教会を破壊しようとしただけとしている⁴¹。

なお、デシャンのみが柱の下にあるタイルについて触れている。「この（マリアの）柱の下には続けて大きなタイルがあり、以下のように書かれている。「神のみ言葉が肉となったのはここである」。そして、わたしたちがミサを挙げるたびに、聖ヨハネによる福音書朗読の最後にわたしたちはひざまずいて「そして神のみ言葉が肉となった」と言うのだ」⁴²。ヨハネによる福音書の「言葉」がまさに現実になった場所を記念するものだが、グージュオンはこのタイルに言及していない。

³⁶ Surlius, *op. cit.*, p. 308 : « les deux grandes colonnes semblables au porphyre tachetées de bleu et blanc, que sainte Hélène fit poser, l'une en la place où était la glorieuse Vierge quand elle conçut le fils de Dieu, l'autre en celle où était l'ange Gabriel, qui se voient encore à présent. Cette dernière est entière, ayant dix-sept pieds de hauteur, et sept de grosseur, l'autre est rompue par le bas environ trois pieds, le reste suspendue en l'air, sans qu'aucune chose la soutienne, laquelle j'ai vu, embrassé et baisé mille et mille fois ».

³⁷ Goujon, *op. cit.*, p. 67 : « L'on regarde du côté du midi avec admiration deux colonnes de 17 à 18 pieds d'hauteur dont l'une est rompue à la base que la voûte soutient de 2 pieds et l'autre est toute entière distante l'une de l'autre de cinq pieds. Elles marquent l'endroit où était la sainte et Immaculée Vierge mère de Dieu, et l'archange Gabriel, lorsqu'il apparut à cette sainte dame, lui annonçant les premières nouvelles de notre Rédemption ».

³⁸ Des Champs, *op. cit.*, pp. 192-193 : « Du côté occidental, il y a deux grandes colonnes de marbre distantes l'une de l'autre trois pieds et demi, l'une desquelles regarde le midi, et est assise sur le même lieu où l'ange salua la très sacrée Vierge, à l'opposite d'une autre colonne qui marque l'endroit, où pendant ce temps-là elle se tenait en prières, celle-là depuis plusieurs années (selon ce que nos religieux m'assurèrent) fut rompue par les Turcs ».

³⁹ Surlius, *op. cit.*, p. 309. シュリウスによると、この柱に触れると病気が治るといわれ近隣の住人が宗教・国籍を問わず訪れるという。病人自身が来られない時はシャツやターバンなど身につけるもので柱をこすると病気が治ることがあるとされている。デシャンも同様の話を伝えている（194-195 ページ）。

⁴⁰ Des Champs, *op. cit.*, p. 193.

⁴¹ Goujon, *op. cit.*, p. 67.

⁴² Des Champs, *op. cit.*, p. 193 : « sous icelle l'on y laisse continuellement un large carreau avec cet écriteau : *HIC VERBUM CARO FACTUM EST* : C'est ici que le Verbe a été fait chair, et même à chaque messe que nous célébrons, sur la fin de l'Évangile de saint Jean, nous disons en fléchissant les genoux : *ET HIC VERBUM CARO FACTUM EST* ». Citation de Jn 1, 14 : « *Et verbum caro factum est* (Et le Verbe s'est fait chair) ».

3.2. 聖ヨセフ教会

受胎告知教会の北側約 200 メートルのところに聖ヨセフ教会がある。中世から巡礼地となっており、17 世紀にフランシスコ会の教会が建設された頃にはすでに「聖ヨセフの仕事場」と呼ばれていた。現在もビザンツ帝国時代の地下礼拝所やサイロなどが残されている。現存の教会は 1914 年に建築された。

シュリウスとデシャンには記述がなく、グージョンのみが廃墟となった聖ヨセフの家を描写している。長さ 48.6 メートル、幅 16.2 メートルの、3 つの礼拝堂を持つ教会の跡が残っていたということである。

聖ヨセフの家は、この神聖な住居（受胎告知教会）から北の方に石を投げて届くくらいの距離しか離れていない。この国の人々は彼らの祖先の古い言い伝えに従ってこの場所を「デュカン」または「シャニア」と呼んでいる。われわれの言葉では共同作業室あるいは仕事場という意味である。つまりこの場所は、マリアの貞節な夫が彼の労苦の結果であるイエス=キリストとその神聖な母を養うために働いていた場所なのだ。読者のあなた方に本当のことを言うと、わたしにはこの小さな家の中に廃屋しか見えなかった。そしてこの廃墟を通して、この嘆かわしい外見から判断すると、かつてはかなり美しい教会があったことを示す残骸が見えた。その教会は長さ 150 ピエ、幅 50 ピエはあったはずだ。東側、主祭壇の方にはかなりうまく建てられた礼拝堂が 3 つあった⁴³。

イエスが大工の息子であり、彼自身も大工であったことは、福音書の中に故郷ナザレの人々の言葉として残されている⁴⁴。ヨセフが家族を養うために大工として働く仕事場は当然あってしかるべきでだが、このように聖書などに記載のない日常生活を想起させるような場所が巡礼の対象になる例がある。ヨセフやマリアの普段の生活を想像することで、彼らの存在をより身近に感じる効果があったと思われる。

3.3. 聖母の泉

フランシスコ会修道院から北に 300 メートルほどのところにある聖母の泉は、聖ヨセフ教会がヨセフの日常を想起させるのと同様に、聖母マリアの日常を感じさせる巡礼地である。現在はマリアの井戸と呼ばれ、すぐ近くにギリシャ正教会の聖ガブリエル教会がある。シュリウスは修道院から 830 歩、デシャンは受胎告知教会から 600 歩離れているとしている。

「ナザレの人々は「マリアの泉」と呼んでいる。泉の水は水晶よりも澄んでいて、長さ 28 歩、

⁴³ Goujon, *op. cit.*, p. 69 : « La maison de saint Joseph, est éloignée de cette sacrée demeure d'un jet de pierre seulement, tirant du côté du septentrion. Les gens du pays suivant l'ancienne tradition de leurs pères, appelant ce lieu Ducan, ou Chania, qui veut dire en notre langue, ouvroir ou boutique à travailler : c'est le lieu où ce chaste époux de Marie travaillait pour nourrir du fruit de ses peines, Jésus-Christ et sa sainte mère. À vous dire le vrai, je ne vis de cette petite maison que des masures ; et à travers de ces ruines, je vis quelque reste qui montrent qu'il y avait une église assez belle selon qu'on peut juger de cette déplorable apparence. Elle pouvait être longue de cent cinquante pieds de long, et cinquante de large ; où l'on remarque que du côté de l'orient à côté du maître-autel, il y avait trois chapelles assez bien bâties ».

⁴⁴ マタイ 13 章 55 節、マルコ 6 章 3 節。

幅 11 歩はある白い石に刻まれた水盤に落ちている。そこから水は貯水槽に流れ込んでいる。貯水槽は昔は丸天井で覆われていたが、今は壊れてしまっている。ここには 16 段の石段を降りていく。こちらは「イエスとマリアの泉」と呼ばれている。その理由は、聖処女が毎日家事に必要な水を汲みに来たり、ここで子どもの衣服を洗ったりしたからである。この泉はトルコ人によって「天使ガブリエルの泉」と呼ばれている。聖処女が水を汲みに行くと、しばしば天使が彼女を手伝い、(彼らが言うには)「ごきげんよう、マリア」という言葉で彼女に挨拶をしたからだという⁴⁵。

泉の水はとても甘く、熱を下げる効果があるという。「修道士たちはほかの水を飲まない。この水が甘くおいしいほかに、この水が熱を下げる特別な効果があるからである」⁴⁶。シュリウスによると、この泉の水は瓶詰めされてフランスなどにも運ばれていたという⁴⁷。

現存の聖ガブリエル教会は 1750 年にそれまであった 3 つの小さな教会の上に建設された。17 世紀の巡礼者がこの教会に言及していないのは当然であるが、グージョンの「40 人の殉教者教会」が聖ガブリエル教会の廃墟を指しているのではないかと思われる節がある。「この 40 人の殉教者教会はもはや廃墟にしか見えず、イエスとマリアの泉と呼ばれる泉の近くにある。この泉はあの聖家族が日常に使っていたのでこう呼ばれている」⁴⁸。シュリウスとグージョンの「イエスとマリアの泉」が同一の泉を指しているのであれば、聖ガブリエル教会と 40 人の殉教者教会を同一視することが可能だろう。残念なことに、グージョンの記述には位置情報などが不足しているため断言はできない。

グージョンは 40 人の殉教者教会の跡地について詳しく描写している。「先述のイエスとマリアの泉の少し向こうで、聖ガブリエルに捧げられた地下の礼拝堂へ小さな石段を降りていく。礼拝堂は長さ 24 ピエ、幅 14 ピエある。中央に祭壇があり、そこでしばしばミサを挙げる。周囲の壁に時が破壊し、湿気が消してしまった絵のあとが残っているのが見える。礼拝堂は今や地面と同じ高さで、穴から入っていくしかなく、少なくとも良い案内人がいないと見つけれられない」⁴⁹。

⁴⁵ Surius, *op. cit.*, p. 310 : « ceux de Nazareth appellent *Aaim Mariam*, Fontaine de Marie, dont les eaux sont plus claires que le cristal, qui tombent dans un beau bassin ciselé de pierre blanche, contenant en longueur vingt et huit pas, et en largeur onze, et de là coulent en un réservoir qui autrefois était couvert d'une voûte, qui maintenant est enfoncée, où par ci-devant on descendait par seize degrés de pierre. Elle se nomme Fontaine de Jésus Marie, à cause que la sainte Vierge y allait tous les jours prendre de l'eau pour la nécessité de sa maison, et y lavait les linges pour son enfant. Cette fontaine est aussi appelée des Turcs, la Fontaine de *l'Ange Gabriel*, à cause que la Sainte Vierge allant quérir de l'eau, souventes-fois il la servait et (comme ils disent) la saluait avec ces mots, *Salech Maria* : Je vous salue Marie ». このエピソードはヤコブ原福音書 11 章を元にした伝説とされている (Le Protévangile de Jacques, in *Évangiles apocryphes*, éd. France Quéré, Édition du Seuil, 1983, pp. 75-76)。

⁴⁶ Des Champs, *op. cit.*, p. 196 : « aussi nos religieux ne boivent pas d'autre, car outre qu'elle est douce et agréable, elle a cette vertu particulière qu'elle guérit les fièvres ».

⁴⁷ Surius, *op. cit.*, p. 311.

⁴⁸ Goujon, *op. cit.*, p. 70 : « Elle ne parait plus qu'en ruine, que l'on voit proche la fontaine appelée de Jésus, et de Marie, parce qu'elle était à l'usage continuel de cette sainte famille ». グージョンはこの後、幼いイエスがこの泉に水を汲みに来たが水がめが割れてしまったので、服の袖に水をためて持って帰ったというエピソードを紹介している。

⁴⁹ Goujon, *Ibid.* : « Un peu au-delà de la fontaine d'où nous venons de parler l'on descend par un petit degré de pierre dans une chapelle sous terre dédiée à saint Gabriel. Elle est de 24 pieds de longueur et de quatorze de large. Il y a un autel tout au milieu où l'on dit quelquefois la messe, où autour contre la muraille, l'on voit quelque reste de peinture que le temps a ruiné, et que l'humidité a tout effacé. Elle est à présent à fleur de terre où l'on n'entre que par un trou et à moins de n'avoir un bon guide, il est impossible de la trouver ».

地下の礼拝堂だけが残り、地上から見渡しただけでは入口もわからないような状態だったことが読み取れる。

グージョンはこの教会がナザレのシナゴグだったとする。「40人の殉教者教会はキリスト教徒がこの地方の支配者だった時に、シナゴグの跡地に建てられた。シナゴグはわれらが愛すべきイエスが幼いときにときどき教えを受けラビたちに質問をし、彼らと討論するために通っていたユダヤ人の教会である」⁵⁰。グージョンにとってこのシナゴグは幼いイエスが通ったもので、イエスが教えを説いたという福音書のエピソードにはまったく言及していない⁵¹。

3.4. 会堂（シナゴグ）

福音書でイエスが説教をしたといわれるシナゴグの跡だとされるのが、ナザレ旧市街のほぼ中心に位置するシナゴグ教会である。1771年からギリシャカトリック教会によって管理されており、内部には古いシナゴグの遺構が残っている。町の北東にあるグージョンが言及しているシナゴグの跡とされる地下礼拝堂とは全く別の場所である⁵²。

シュリウスのみがこの場所の記述を残している。「この荒廃した町のほぼ真ん中に、いまだにユダヤ人のシナゴグの大きな地区が見える。主はある安息日にこのシナゴグへ入って行かれ、説教をされたが、主が真実を述べられたため、主は外に引きずり出され高い山の石の上に連れていかれ、上から下に突き落とされるところだった。（中略）このシナゴグ地区は今でも長さ 60 ピエ、幅 30 ピエあり、白い石でできた美しいアーチが建てられていて、今は駱駝の厩舎として使われている」⁵³。

この記述によって示されるシナゴグの位置は、現在のシナゴグ教会と一致しているようである。また、シュリウスがこの場所が福音書のエピソードの舞台として認識していることも明らかである。彼が訪問した当時はシナゴグでも教会でもなく、駱駝の厩舎として利用されていたことが読み取れる。

3.5. ノートル＝ダム・ド・レフロワ教会

イエスがナザレ中心部にあった会堂から町の南に位置する断崖へと連れていかれた道もまた巡

⁵⁰ Goujon, *Ibid.* : « L'église des Quarante-Martyrs fut bâtie du temps que les Chrétiens étaient les maîtres en ce pays, sur les ruines d'une synagogue, église des Juifs où notre aimable Jésus dans son bas âge allait quelquefois pour enseigner, interroger les rabbins, et disputer avec eux ».

⁵¹ この沈黙は不可解である。フランシスコ会修道士のグージョンが福音書のエピソードを知らないはずはない。実際、この後彼はイエスが群衆に突き落とされそうになった断崖について記述を残している。この地下礼拝堂がシナゴグの跡であると教えられたものの、イエスが教えを説いたシナゴグであるとするだけの確信を持てなかったのかもしれない。

⁵² グージョンの「40人の殉教者教会」の跡地がこのシナゴグ教会を指す可能性も検討したが、マリアの泉との位置関係、およびグージョンがイエスの説教という福音書のエピソードに触れていないことから、別の場所を指していると考えの方が妥当であろう。

⁵³ Surius, *op. cit.*, p. 311 : « Au milieu presque de cette ville ruinée, se voit encore un grand quartier de la synagogue des Juifs, dans laquelle Notre-Seigneur entra un jour de sabbath [sabbat], et y prêcha, mais parce qu'il leur disait la vérité, il fut tiré dehors, et traîné sur le roc d'une haute montagne, pour être précipité du haut en bas. [...] Le quartier de la susdite synagogue a encore à présent soixante pieds en longueur, et trente en largeur, relevée d'une belle voûte de pierre blanche, servant à présent d'écurie aux chameaux ».

礼の対象である。この道の途中にあったノートル＝ダム・ド・レフロワ教会の廃墟についてゲー
ジョンが記述を残している。「先述の天使ガブリエルの礼拝堂から戻ってきて、南の方に 2500 歩
小さな丘を登っていくと別の教会の廃墟に出会う。今はこの教会の礼拝堂しか残っていない。テ
イモールのノートル＝ダム教会、恐れあるいは恐怖のノートル＝ダム教会と呼ばれている」⁵⁴。

息子のイエスが怒った群衆に連れて行かれたというニュースを聞いたときに母のマリアが感じ
た恐怖を記念するために建てられた教会である。現在では、1876 年に建設されたフランシスコ会
の礼拝堂の廃墟が残っている。おそらく同じ道をたどったはずのシュリウスは女子修道院の壁と
内陣、大祭壇が残っているのを見ているが⁵⁵、同じ廃墟かどうかは不明である。

3.6. 断崖

フランシスコ会修道院から南へ 2 キロ、30 分ほど離れた高さ 392 メートルの、岩が張り出した
場所はジャベル・エル・カフセ (Djebel El Qafsé) と呼ばれ、ビザンツ帝国時代からイエスの説教
に怒った群衆が彼を突き落とそうとした断崖とされていた⁵⁶。この場所についてはシュリウスと
ゲージョンが記述を残している。

「修道院から半時間ほど離れているこの断崖の場所に、聖ヘレナは、大部分は石に刻まれている
道を整備し、教会の建物を建てるために大きな出費をした。今では教会のあとは岩に刻まれた
祭壇しか残っていないが、ナザレの修道士はそこにミサを挙げに行く。同じ場所に同じ岩に刻ま
れた貯水槽が 2 つある。この場所はイタリア語でイル・プレシピシオと呼ばれている」⁵⁷。

ゲージョンの記述は以下のとおりである。「この場所 (ノートル＝ダム・ド・レフロワ教会) か
らたつぷり半リユは離れているこの断崖の山はナザレからは 1500 歩しか離れていない。道をた
どってみよう。道は最初の 1000 歩はかなり通りやすく、美しい平野のなかを進んでいく。しかし
そのあとはかなり登りにくい丘を抜けていく」⁵⁸。この断崖へと登っていく道は整備されており、
3 分の 2 ほどは容易に登れるが、後半の 3 分の 1 はかなり急な登り道になっている。

シュリウスによれば断崖には祭壇が残るのみだが、ゲージョンによると礼拝堂のような洞窟で
ある。2 つの貯水槽という記述は両者に共通している。「それは今では全部で 6 から 7 ピエの礼拝

⁵⁴ Goujon, *op. cit.*, p. 70 : « Quand on retourne de la chapelle de l'Ange Gabriel dont nous venons de parler, tirant au midi, montant une petite colline d'espace de deux mille cinq cents pas, on rencontre les ruines d'une autre église, de laquelle il n'y a de reste qu'une chapelle : on l'appelle Notre-Dame de la *timor*, Notre-Dame de la peur, ou de la crainte ».

⁵⁵ Surius, *op. cit.*, pp. 311-312 : « Entre Nazareth et le mont susdit on voit sur la pointe d'une motte des belles pièces des murailles d'un cloître de religieuses où le chœur et le grand autel, comme j'ai remarqué, sont encore en leur entier ».

⁵⁶ この断崖は中世には「主の跳躍」(le Saut du Seigneur) と呼ばれ、イエスが群衆から逃れるために崖から飛んだが、無傷で逃れたとする伝説がある。

⁵⁷ Surius, *Ibid.*, p. 311 : « En ce lieu du précipice, distant de notre couvent une demi-heure, sainte Hélène y fit grandes dépenses, tant pour y faciliter le chemin dont la plupart est taillé dans le roc, que pour l'édifice d'une église, de laquelle il ne reste plus qu'un autel taillé dans le roc, où nos religieux de Nazareth vont célébrer la messe. Il y a encore en ce même lieu deux citernes taillées dans le même roc. Ce lieu s'appelle en italien : *Il Precipicio* ».

⁵⁸ Goujon, *op. cit.*, p. 71 : « Tandis que nous dirons que cette montagne du précipice écarté de plus d'une grande demi-lieue en cet endroit, est éloignée de Nazareth de mille cinq cents pas seulement ; faisons-en le chemin : il est assez commode, d'abord pendant mille pas, au milieu d'une assez belle pleine : mais après parmi des collines assez difficiles à grimper ».

堂の形をした小さな洞窟である。まだ絵画のあとがいくらか残っているのがわかり、ときにはミサを挙げずにはすまされない。しかし司祭たちはめまいにとらわれないようにしなければならない。恐れを抱かずにこの断崖を注意深く見つめる方法はないのだから。そのわきには貯水槽が 2 つあり、小さい方が右に、美しい方が左にある。この近くには、この地方の言い伝えが教えるようにかつては修道院と美しい教会があったことが多くの廃墟からわかる」⁵⁹。

さらにグージョンは、かつてこの場所に残されていたが彼の時代には失われてしまった遺跡について言及している。「この同じ山の中でイエス=キリストはユダヤ人の手からそっと逃れられ、岩の中に入ってしまった。そこには彼の衣服のわずかな襞さえまるで雪に残されたかのように岩の上に残された。しかし何という不幸だろう！世界と同じくらい長く残るはずのこれらの神聖で奇跡的な跡はユダヤ人の不実な思い違いによりハンマーやハサミ、石など、巡礼者の無遠慮な信仰心によって消されてしまった」⁶⁰。ルカによる福音書では、イエスは激昂する人々の間を「通り抜けて立ち去る」⁶¹。グージョンによるとイエスは人々の手から逃れ、岩の中に入っしまい、その服のあとがまるで岩の上に刻まれたかのように残った。しかしその後、イエスに反対するユダヤ人や、過去の巡礼者によってこの服の跡はすべて破壊されてしまったという。

3.7. 主の洞窟

主の洞窟は、シュリウスのみ言及がある。「断崖の方にさらに半時間ほど行くと、美しく大きな洞窟が見える。片方の長さは 11 歩、もう片方は 25 歩あり、幅は 24 歩ある。狭い方の側から別の洞窟に入る。そちらは長さ 9 歩、幅 5 歩ある。この小さな洞窟で主は何度も深い祈りの中徹夜をされた。わたしはこの場を訪れて実際人を内部から信仰へと動かすものを感じた」⁶²。この洞窟も伝説や言い伝えから生まれたイエスの日常を想起させるような巡礼の場だと言えるだろう。修道士であるシュリウスはこの場を訪れ、祈るイエスの姿を想像しながら追体験をするような感覚で自分も祈りを捧げたのかもしれない。

⁵⁹ Goujon, *Ibid.* : « C'est à présent une petite grotte en forme de chapelle de 6 ou 7 pieds en tout, où l'on voit encore quelque reste de peinture, l'on ne laisse pas d'y dire quelquefois la messe : mais il faut que les prêtres ne soient pas sujets à quelque vertiges. Car il n'y a moyen de regarder attentivement ce précipice sans frayeur. Il y a deux citernes à ses côtés, dont la plus petite est à la droite et la plus belle est à la gauche, où l'on voit quantité de ruines qui marquent qu'elle avait en son voisinage quelque couvent et belle église, comme la tradition du pays l'enseigne ».

⁶⁰ Goujon, *Ibid.* : « c'est dans cette même montagne où Jésus-Christ se déroba d'entre les mains des Juifs, et se fit place dans un rocher qu'il pénétra, et où il imprima comme sur la neige, jusqu'aux moindres plis de ses vêtements. Mais malheur ! ces saintes et miraculeuses marques qui devaient autant durer que le monde, pour la confusion de la perfidie des Juifs, ont été effacées à coups de marteau, de ciseau, et de pierre, par l'indiscrete dévotion des pèlerins ».

⁶¹ イエスがどのように人々の間を通り抜けたのかについては解釈がわかれているようである。ルカの記述からは、イエスをとらえていた人々の前で何かが起こって彼らが思わず手を離してしまい、イエスは誰にも邪魔されずに静かにその場を立ち去ったと解釈することもできよう。しかし、中世の言い伝えによればイエスは崖から飛び降りたことになり、グージョンによれば岩の中に吸い込まれたかのように隠れたことになる。

⁶² Surius, *op. cit.*, p. 312 : « Une bonne demi-heure plus avant vers le précipice on voit une belle et grande grotte, ayant d'un côté en longueur onze pas, et de l'autre côté vingt-cinq, et en largeur vingt-quatre, du côté le plus étroit on entre dans un autre, qui a neuf pas de longueur, et cinq de largeur. En celle-ci notre Sauveur a passé souventefois des nuits entières en ses plus profondes oraisons. J'ai fort bien visité cette place, et trouvé en effet qu'elle émeut une personne intérieurement à la dévotion ».

3.8. 主のテーブル

1861年にフランシスコ会によって建てられたメンザ・クリスティ聖堂は受胎告知教会の北西約180メートルのところであり、復活後のイエス=キリストが使徒たちと食事をしたとされる岩のテーブルが残されている。福音書には復活後のイエスが弟子たちとナザレで食事をしたという記述はないが、ヨハネ21章でイエスはティベリアス湖畔で漁をする弟子たちの前に現れ、弟子たちにパンと魚を与えている。また、マタイ28章ではイエスが指示しておいた山（タボル山とされる）で弟子たちの前に出現している⁶³。地理的にはこの2回の出現が近いが、イエスが何かを食したとされるのはルカ24章41-43節で弟子たちの前で焼き魚を食べたときのみである⁶⁴。メンザ・クリスティ聖堂は福音書などのエピソードを原典とした巡礼地というより、伝説や言い伝えを元にしたものだと思われる。

「西側の、かつて町の一部が建設されていた山のほぼ上に高さ3ピエ、長さ12ピエ、幅10ピエの丸テーブルのような形に作られた岩が見える。12~15人くらいの人が座れそうな大きさで、この地方の言い伝えによるとわれらの主が復活後にすべての使徒たちと食事をした場所だと言われている。このため主のテーブルと言われている。これは本当のようである。というのは、この石の上に少なくとも指4本分の幅くらいの深さで主の体の跡が完全に残されているのがわかるからだ。この岩はかつて鉄柵で覆われていたが、ムーア人たちがそれを持って行ってしまった」⁶⁵。

岩のテーブルは石灰岩の一枚岩で、現在はメンザ・クリスティ聖堂の中心に安置されている。デシャンは岩の大きさには触れていない。「そこから遠くないところに、大きな石が見える。ここは信心から訪問されるが、それはこの石がイエス=キリストのテーブルに用いられ、この石の上でイエスは何度も使徒たちと食事をとられたと一般に思われているからである。近くで石をよく見ると、イエスとその神聖な体の後をいくつか残されたようである」⁶⁶。二人の記述から、彼らの時代には岩はむき出しのまま丘の上に残されていたことがわかる。

4. まとめ

本稿ではシュリウス、グージョン、デシャンの3人のフランシスコ会士による聖地巡礼記のナ

⁶³ 『黄金伝説』は復活後のイエスの出現が10回あったとしている。上記の出現は7回目と8回目に当たる。Jacques de Voragine, *La Légende dorée*, tr. J.-B. M. Roze, Flammarion, 1967, « La Résurrection de Notre Seigneur », t. I, pp. 276-277.

⁶⁴ これは前後の記述からエルサレムでの出来事だと考えられる。

⁶⁵ Surius, *op. cit.*, p. 311 : « Presque au-dessus de la montagne où autrefois était bâtie une partie de la ville vers l'occident, se voit une haute pierre de trois pieds, longue de douze, et large de dix, faite en forme de table ronde, où se peuvent asseoir douze ou quinze personnes, sur laquelle, selon qu'affirme la tradition du pays, Notre-Seigneur avait pris la réfection avec tous ses apôtres après sa Résurrection. C'est pourquoi ils la nomment la Table de Notre-Seigneur, ce qui est vraisemblable : car on voit encore en cette pierre la forme de son corps parfaitement imprimée pour le moins la profondeur de quatre doigts. Elle était autrefois couverte d'un[e] grille de fer, que les Mores ont emporté ». シュリウスはこのあと、イエスが湧き出させて弟子たちと水を飲んだという伝説が残る泉について言及している。ナザレ旧市街の地図によると、メンザ・クリスティ聖堂の南130メートルのところにある（*Les Guides Bleus Israël*, éd. Elian-J. Finbert, Hachette, 1961, p. 199）。

⁶⁶ Des Champs, *op. cit.*, p. 196 : « Guères loin de là, l'on voit une grande pierre que l'on va visiter par dévotion, parce que c'est le commun sentiment qu'elle a servi de table à Jésus-Christ, et que sur icelle il a mangé plusieurs fois avec ses apôtres, et lorsqu'on la considère de près, il semble qu'il y a laissé quelques marques de son sacré corps ».

ザレについての記述内容を比較した。内容的にはシュリウスの記述がもっとも詳細であり、実際にナザレの聖地訪問をするルートを念頭に置いて執筆したように思われる。彼の巡礼記の第2部4章はナザレの町と受胎告知教会の描写に、5章はその他の巡礼地に当てられている。町の東側にある受胎告知教会を出発して北に向かい、マリアの泉を訪れ、西側のメンザ・クリスティ聖堂に回り、そこから町の中心にあるシナゴグ跡へ降りていく。そこから今度は南に道を取り、断崖の山へ登るといのように、シュリウスの記述に従ってナザレを訪問することも可能だろう。中世の巡礼記が持っていたガイドブックとしての機能をまだ保持しているとも言える。

グージョンの記述にはシュリウスほどの具体性がない。受胎告知教会については詳細かつ具体的な描写やこの教会がキリスト教徒に対して持つ意味と重要性を強調しているが、その他の場所に関しては、すぐ近くの聖ヨセフ教会と、マリアの泉とその隣の聖ガブリエル教会の地下礼拝堂、ノートル=ダム・ド・レフロワ教会とその先の断崖にしか触れていない。

デシャンの記述も簡潔である。彼も受胎告知教会については非常に詳細に説明しているが、その他の場所はマリアの泉とメンザ・クリスティの岩のテーブルにしか触れていない。

後者2人の記述の簡潔さをどうとらえればよいのだろうか。ナザレのもっとも重要な場所が受胎告知教会であることは間違いないが、その他の場所にはそれほど重要性を見出さなかったのか、あるいはもっと現実的な理由があってそれらの場所を安全に訪問することが難しく、詳しい描写を残すことができなかったのだろうか。ナザレのフランシスコ会士が常に安全を脅かされていたことは彼ら3人の記述から読み取れる。

ナザレに現存する教会の歴史などを確認すると、起源をビザンツ帝国時代や十字軍の時代にさかのぼるものが多いが、そのほとんどが18世紀以降に再建されたものであることがわかる。逆に言えば、17世紀の巡礼者たちが見たナザレはほぼ廃墟で、わずかな住人しかいなかったと考えられる⁶⁷。たとえ廃墟であっても、彼らはそこに巡礼の地を見出す。それは十字軍の時代やビザンツ帝国時代、そしてイエスの生きた時代へと過去へ遡り、その過去から続く信仰を取り戻そうとすることかもしれない。彼らの巡礼記から、信仰の拠り所としてこれらの巡礼地を守り、これから発展させていこうとしている修道士たちの姿勢が読み取れるのではないだろうか。

主要参考文献

17世紀の巡礼記および旅行記

引用部分は現代フランス語に直した

ARVIEUX, Chevalier Laurent d', *Memoires du Chevalier d'Arvieux*, éd. Jean-Baptiste Labat, Paris, Delespine, 1735,

⁶⁷ Chevalier Laurent d'Arvieux, *Memoires du Chevalier d'Arvieux*, éd. Jean-Baptiste Labat, Paris, Delespine, 1735, 6 vol., t. II, p. 268 : « Elle [Nazareth] n'est habitée aujourd'hui [en 1660] que par les religieux de la Terre Sainte, et par quelques pauvres Chrétiens qui sont attachés à leur service, et que leurs aumônes font subsister, et par quelques Grecs. Ils logent dans des grottes fermées de méchantes portes, que les Arabes leur volent assez souvent ». 「ナザレには1660年の今日、聖地の修道士たちしか住んでいない。それと、修道士に仕える何人かの哀れなキリスト教徒だけである。その人たちの寄付や何人かのギリシャ人によって修道士たちは暮らしている。彼らはみすばらしいドアで閉ざされた洞窟に住んでいて、アラブ人がしばしば彼らから物を盗んでいく」。

6 vol.

BOUCHER, Jean, *Le Bouquet sacré composé des plus belles fleurs de la Terre sainte*, éd. Marie-Christine Gomez-Géraud, Champion, 2008.

DES CHAMPS, Barthelemy, *Voyage de la Terre Sainte et du Levant*, Liège, Pierre Danthez, [1678].

GOUJON, Jacques, *Histoire et voyage de la Terre-Sainte*, Lyon, Pierre Compagnon et Robert Taillandier, 1672.

SURIUS, Bernardin, *Le Pieux Pelerin, ou Voyage de Jerusalem*, Bruxelles, François Foppen, 1666.

その他の資料

La Bible de Jérusalem, tr. École biblique de Jérusalem, Paris, Desclée de Brouwer, 2000.

La Bible, traduction de Louis-Isaac Lemaître de Sacy, éd. Philippe Sellier, Paris, Robert Laffont, « Bouquins », 1990.

Catholicisme, Hier-Aujourd'hui-Demain, dir. G. Jacquemet, Paris, Letouzey et Ané, 1948-2003, 15 vol.

Dictionnaire d'Histoire et de Géographie ecclésiastiques, dir. Alfred Baudrillart, Albert Vogt, Urbain Rouziès, Paris, Letouzey et Ané, 1912-2003, 28 vol. (inachevé).

Dictionnaire de Théologie catholique, dir. A. Vacant, E. Mangenot, Paris, Letouzey et Ané, 1903-1972, 30 vol.

Dictionnaire encyclopédique de la Bible, Centre informatique et Bible, Abbaye de Maredsous, Belgique, Brepols, 1987.

Protévangile de saint Jacques, in *Évangiles apocryphes*, éd. France Quéré, Édition du Seuil.

Les Guides Bleus Israël, éd. Elian-J. Finbert, Hachette, 1961.

『聖書』 新共同訳 旧約聖書続編つき 日本聖書教会 2007年(1987年、1988年)

荒井献 『イエス・キリスト(上) 三福音書による』 講談社学術文庫 2001年

『イエス・キリスト(下) その言葉と業』 講談社学術文庫 2001年

犬飼道子 『聖書を旅する3 福音と福音書』 中央公論社 1996年

シュトラウス、ダーフィット・フリードリヒ 『イエスの生涯 I』 岩波哲男訳 近代キリスト教思想双書 教文館 1996年

ベネディクト16世 ヨゼフ・ラツィンガー 『ナザレのイエス プロローグ：降誕』 里野泰明訳 春秋社 2013年

Pèlerinage en Terre Sainte sur les pas de la Vierge Marie, brochure publiée par l'office du tourisme d'Israël, 2011.

https://www.holyland-pilgrimage.org/sites/default/files/hoveret_FRE.pdf

Custodia Terrae Sanctae, Missionnaires franciscains au service de la Terre Sainte, Sanctuaire Nazareth :

<http://www.nazareth-fr.custodia.org/>

(ふじい ようこ / 実践女子大学非常勤講師)